

ダニエル書5章25-28節 「持っている物を取られる神」

1A メネ： 治世を数えられた神

2A テケル： 目方の足りない天秤

3A パルシン： 分割される国

本文

ダニエル書 5 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは前回 4 章まで来ました。午後礼拝にて 5 章を一節ずつ読みたいと思いますが、今朝は 25-28 節に注目したいと思います。「25 その書かれた文字はこうです。『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。』26 そのことばの解き明かしはこうです。『メネ』とは、神があなたの治世を数えて終わらせられたということです。27 『テケル』とは、あなたがはかりで量られて、目方の足りないことがわかったということです。28 『パルシン』とは、あなたの国が分割され、メディアとペルシヤとに与えられるということです。」

私たちは 5 章において、驚くべき歴史的出来事を読みます。世界帝国となったバビロンが、一夜にして滅びるところです。聖書には、ある一つの出来事が多くの預言によって預言されることがありますが、バビロンの崩壊はその一つです。既に私たちはイザヤ書とエレミヤ書でそれを見ました。そして、黙示録の最後においてもそれを見ます。神の救いのご計画にとってバビロンが倒れるのは、大きな位置を占めています。それは、私たちが生きていくに当たって、とても大切なことを神が取り扱われたからです。

時は紀元前 539 年です。バビロンは、メディア・ペルシヤ連合軍と戦っていました。多くの土地を奪い取られましたが、都バビロンは無傷で残っていました。非常に強固な町であり、水もユーフラテス川が真ん中に流れており困らず、食糧の備蓄は、20 年は持つと言われていました。その中で、王ベルシャツアルは千人の貴人たちのための大宴会を催したのです。そして、ぶどう酒を飲みながら、なんとかつてネブカデネザルがエルサレムから取って来た神殿の宮の器を持ってこさせました。そして、その器にぶどう酒を注いで飲み、自分たちの神々を賛美することなのです。すると突然、王の宮殿の塗り壁に、人間の手の指が現れて、そこに物を書きました。王は恐怖におびえ、解き明かす者たちを呼び、解き明かせた者には褒美を与えようと言いました。けれども、誰もいません。しかし、王母が出てきて、ネブカデネザルに仕えていたダニエルがいると教えました。それでダニエルを連れて来て、解き明かしてほしいと頼みました。そして解き明かしたのが、今読んだところです。『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン。』であります。

1A メネ： 治世を数えられた神

初めに、「『メネ』とは、神があなたの治世を数えて終わらせられた」と言っています。神は、ベル

シャツアルにあなたの治世は数えられていたのだよ、と伝えています。まるで時限爆弾のように、タイマーがセットされていてそれでゼロになったのだよ、ということです。そしてついに終わった、と言っています。

ヨブという人は、「主は与え、主は取られる。(1:21)」と言って主の御名をほめたたえましたが、主は私たちに命を与え、そしてそれを取られる日を定めておられます。初めがあり、そして終わりがあるのです。その与えられた日々を、終わりがあってその時にどのようにその人生を終わらせるか、目標は何であるのかを見定めて数えるようにして生きていくのだ、ということであります。私たち人間はとかく、とりあえず今を生きていて、それで事がうまく運んだら、それをとりあえず維持して、それで日々をやりくりしていこうと思ってしまいます。しかし人生というのは、終わりから始まらなければいけないのです。終わりがあって、今の自分がいるのです。終わりをいかに美しくさせるか、その目標があって、それで今の残された日々をどう生かすかが定まるのです。

キリストを信じる者、いや全て生きている者にとって、その終わりというもの、その終着地点はイエス・キリストご自身です。この方にお会いすることです。「ピリピ 3:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。」私たちがどのような境遇に置かれていても、どんな職業に就いていても、全ての人イエス・キリストに会うということを目指しています。その終着地に行くのだということです。「2:11 すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためなのです。」とあります。そこで、主にあって自分がどのように生きて来たのかの、評価を受けます。ある者は五タラント任せられて、それで商売をして五タラントもうけ、また他の者は二タラント任せられて、二タラント商売をしてもうけ、そこで主なるイエス・キリストがそれぞれに対して、「マタイ 25:21 よくやった、良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」という評価を受けるのです。しかし、一タラント受けとってそれを土に埋めたものがいます。これは、神に、そしてキリストのことを聞いたけれども、これには関わらない！と決めて人生を歩んだ人の姿です。彼は、その一タラントも取り上げられて、外の暗闇に追い出されます。

ですから、終わりの日に主イエスに会うことを念頭に入れて、今、自分が何をしなければいけないのかを考え、祈らなければいけないのですが、どうしてもその終わりというものに実感が湧かないのが私たちの肉の弱さです。今の生活がいつまでも続くとしても考えてしまいます。私は 40 歳を過ぎた時に、「ああ、人生のちょうど半分の地点を折り返したんだな。」という実感が湧きました。けれども、おそらく私よりも年上の方々は、もっと異なる時間間隔でお過ごしであろうと思います。残された時間を主に対してどのように使うべきかの意識が、若い時はどうしても薄くなってしまう。ソロモンがそのことに後悔をしていて、次のように述べています。「伝道者 12:1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言

う年月が近づく前に。」ソロモンは、人生の中でいろいろなことを試し、意味のあることを行おうとしましたが、全てが道端に水を注ぎかけるように無駄に終わってしまったことを述懐しています。そして終わりにこう言います。「12:13-14 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」神を恐れて、神の命令を守ることが全てであり、終わりには、全て自分のしたことについて神の前で裁かれるのです。

オリンピックが近づくと、電光掲示板によってオリンピックまであと何日という表示が出ます。同じように、私たちの人生は残された日々として数えられるべきであります。先ほど読んだ詩篇 90 篇ですが、それはモーセが祈ったものです。彼は、イスラエルの民が荒野において 40 年放浪したときに、自分もそこにいなければいけない苛酷さを味わいました。目の前に約束の地があったのに、彼らの不信仰によって入ることができず、荒野に留まらなければいけなかったのです。そこで、人々が死んでいくのを数多く見ていったことでしょう。旅の始まりの人口と旅の再出発の時の人口がさほど変わっていないところからも、かなりの人が死んだことが伺えます。その中で彼は祈りました。人が塵に帰らなければいけないのは、神の怒りがあるからだと言いました。なぜなら、初めは人は死ぬようには造られておらず、アダムが罪を犯したので死が入ってきたからです。そして、年齢が七十年、八十年という短さであり、その中で労苦があり、いろいろな悲しいことも起こります。ですから、こう言いました。「詩篇 90:12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」

正しく数えることができるように、と祈っています。そして、いつ終わるのか分かりません。主の御心であれば、今、自分は生きることができます。その残された日は、もしかしたら一日かもしれません。今日、主にお会いする備えは出来ているでしょうか？ヤコブが言いました。「4:13-15 聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」と言う人たち。あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」」

2A テケル：目方の足りない天秤

そして次に、「『**テケル**』とは、**あなたがはかりで量られて、目方の足りないことがわかったということです。**」とダニエルが解き明かしました。天秤ですね。ここでは、自分のしている良いことが、一つの皿に入れられており、自分のした悪いことがもう一方の皿に入れられており、良いことより悪いことのほうが重かったら、目方が足りないということになります。ベルシャツアルのしていることが、彼が正しいことを行ったことについては目方が足りなかったということでもあります。

神は公正な方です。決して、理由なく裁かれることはありません。「ローマ 2:9-11 患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り、栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。神にはえこひいきなどはないからです。」えこひいきはなさらない方です。ベルシャツアルについては、彼は自分の父ネブカデネザルが、神によってどのようにされたことを知っていました。ネブカデネザルが、神をほめたたえず、バビロンの栄華と富は自分によるものだと高ぶったところ、獣のようになり、七つの時を経て、ようやく理性が戻って来たので、神をほめたたえるようになったことを知っていました。知っているにも関わらず、彼は故意にエルサレムの神を侮り、その神殿から取って来た器でバビロンの神々を賛美したのです。

そしてそれらの神々と呼ばれているものは、見ることも、聞くことも、知ることもできません。まことの神は、自分のしている息をさえ支配しておられます。神によって、呼吸が毎回支えられています。もし神が息を止めるとお決めになれば、その場で止まります。ベルシャツアルは、泥酔で口臭が最悪になっている時に、その息でエルサレムの神を侮りましたが、その息を支えていたのはまさしく、エルサレムの神なのです。私たちは、自分のことは自分で管理している、自分で動かしているのだと勘違いしています。自分の息さえ、どうして無意識のまま呼吸できているのでしょうか？そして心臓はどうでしょうか？私たちは手足を動かすように、脳にいちいち心臓が動くように命令して、それで動いているではありません。自分で出来ていると考えるならば、それは傲慢です。その罪を、ベルシャツアルは犯したのです。

私たちが、自分の善い行ないと悪い行ないを天秤にかけたら、目方は足りるでしょうか？多くの人は、「善はなんとか上回っているのではないか？」と考えています。つまり、自分には悪いことをしたことはあるけれども、まあ、悪いことだけやっていたわけではないし、自分の行なってきた良いことと相殺できるのではないか？と思っているわけです。それで、「そんなに悪い人間ではない」と自己認識、判断しています。

聖書の中に、贖いの日というものがレビ記 16 章と 23 章に書かれています。その日に、神がイスラエルの罪のための贖いを、大祭司を通してしていただきますが、羊を屠ってその血を流して、身代わりに血を流すことによって神から赦しを得ます。けれども、紀元 70 年に神殿がローマによって破壊されました。動物が血を流すための祭壇はなくなりました。そこでユダヤ教では贖いの日、ヨム・キプールと呼びますが、その日に悔い改めて罪を拭い去ってもらうのですが、その悔い改めが自分の悪いことをやめて、正しいことをもっと行なって、それで神から罪を赦していただくように考えられてしまっています。ヨム・キプールの日に近づいたら、ユダヤ教徒のそばにいるといいよ、という冗談を聞いたことがあります。良いことをしてもらえるかもしれないからです。そこまでいかなくとも、多くの人が自分は正しく生きようとしているから、責められることはないだろうと思います。

ところが問題は、人と人を比べて自分が正しいか悪いかを比べているということです。他の人たちと比べて、それほど悪くはないと思っているのですが、神の救いのご計画の中ではそうではありません。人はすべて神によって造られ、終わりの日に神の前に出て行かないといけなのです。神にとっての自分はどうか？ということが問われます。

自分はできていないし、他の人たちもできていないけれども、やはりこれが正しいことだよね？というものを私たちは知っています。それは、聖書では「良心」と呼ばれており、不思議にも誰にも良い悪いと教えられていなかったとしても、それでも間違っていると分かっているのです。「嘘も方便」という言葉があっても、やはり嘘を付けば何かが間違っていると分かります。そして、「浮気も男の甲斐性」などという言葉もありますが、実際は甲斐性どころか、自分にも奥さんにも自信のない、男らしさから全くかけ離れていることもよく知っています。文化や周りがいくら大丈夫だと言っても、どこかで間違っている、これが正しいということが分かっています。それは、全ての人に神の与えた良心があるからです。「ローマ 2:14-16…律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。…私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」

イエス様は、ユダヤ人たちに対して、「マタイ 5:17 わたしが来たのは律法や預言者を破棄するためだと思っはなりません。破棄するためではなく、成就するために来たのです。」と言われました。イエス様こそが律法を成就される方です。そこで言われました、「マタイ 5:20 まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。」当時、最も厳格に律法を守ろうとしていたのがパリサイ派の人たちですから、これは一体どういうことなのか？と聞いていた人たちは驚いたに違いありません。そして、兄弟を馬鹿と叫ぶなら、それは殺したと同じで最後の審判で裁かれる。心の中で情欲をいだいたら、それは姦淫と同じだから、目がつまずかせるなら目を抉り出しなさい。そして、右の頬を打つような者には左の頬を向けなさい、敵を愛して、迫害する者のために祈りなさい、それから、「5:48 天の父が完全なように、完全でありなさい。」

このようにして、自分自身の善い行ないだと思っていることが、いかに神の求められている義とかけ離れているかが分かるでしょう。天秤はもはや、自分の善い行ないと悪い行ないの比較ではなく、自分が良い行ないだと思っていることと、神の義の基準の天秤になっているのです。そうすると、目方があまりにも足りないことに気づきます。イエス様は、聖霊である助け主が、世について謝りを認めさせると言われていますが、義については、「ヨハネ 16:10 わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」と言われました。イエス様が天に昇られることですが、

つまり神の義の基準に達しているから、ご自身は天に上げられることができるのだということです。天においては、イエス様の義は受け入れられます。他に正しいとされていることについて、イエス様のような正しさがなければ、入ることはできないということです。ですから、ベルシャツアルだけでなく、ほとんど全ての人が、いや全ての人が、目方が足りないことになります！

しかし、神の正しさは、律法とは別に示されたとローマ3章に書いてあります。それが、キリスト・イエスによる贖いのゆえ、神の恵みによって、価なしに与えられるとあります(24節)。つまり、自分で行なう義ではなく、キリストの義を神が私たちに与えてくださるところに正しさです。神が、私の罪をキリストに負わせて、私がキリストの義を代わりに身に付けることによって、キリストにあって私が義とみなされるのです。信じ難いことですが、自分は何もしていないのに、不敬虔な者なのに、神は私を見る時に、正しいとみなしてくださいます。キリストにあって見てくださるからであり、完全に神の恵みです。私は不真実であっても、神は真実であり、そのようにしてくださいます。

では、先ほどの天秤の話に戻しましょう。一方の皿には、私の負債、罪を置きます。とてつもない数の罪、とてつもない重い罪です。もう一方の皿にはキリストの義が置いてあります。どちらが重いでしょうか？私の罪のほうが重いでしょうか？いいえ、キリストの義のほうが重いのです。目方が有り余るほどになりました！自分がどんなに罪深いとしても、キリストの正しさと真実のほうが上回るのです。

3A パルシン：分割される国

そして最後の言葉を見ましょう。「『**パルシン**』とは、**あなたの国が分割され、メディアとペルシヤとに与えられるということです。**」これは、メディア・ペルシヤ連合軍が今、バビロンの都に入って、彼を倒し、そしてメディア・ペルシヤ帝国が始まることを意味しています。ペルシヤの国がメディアと戦い、すでに併合していました。そしてメディア人のダリヨスが初めに治め、それからすぐにペルシヤ人の王クロスが治めます。つまり、これまで持っていたバビロンの財宝、その栄光は全てメディアとペルシヤに明け渡されることになるのです。30節には、「その夜、カルデヤ人の王ベルシャツアルは殺され」とあります。どれだけのものを持っていても、瞬く間に自分の持っているものが奪い取られるのです。「マルコ 8:36 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。」とイエス様は言われました。

そしてイエス様は、金持ちの喩えも語られています。ある金持ちの畑が豊作で、倉を立てて、これから何年も安心して、食べて、飲んで、楽しむことができると思いました。「ルカ 16:20-21 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。』神の前に富むのです。つまり、全てを神の前に持って行くのだ、ということを考えながら、人生設計を立てます。自分のために蓄えたら、いつか全て取り去られます。